

独自の取り組みに挑戦し、新たな価値の創出を実現することで、人と社会に貢献している企業がある。  
今回は、比類のない物流システムで顧客とバイオマス発電の発展に寄与する企業、そして、  
サンドイッチ店の運営を通じた雇用の創出や地産地消への取り組みで地域社会に貢献する企業のそれぞれの取り組みを紹介する。



同社のAILによって、最初にPKSが輸送された時のセレモニーの様子。



本写真は同社が得意とするバルク貨物の荷役作業の様子。  
AILの場合、このような船積みや現地の貨物確認の様子がクラウドサービスを通じてお客さまと瞬時に情報交換可能。

## バイオマス燃料の輸送をトータルサポート。 独自の物流システムで新たな価値を創出。

植物由来のバイオマス燃料などを使用することで、CO<sub>2</sub>の増加に影響を与えない「カーボンニュートラル」を実現するバイオマス発電。愛知海運株式会社は、海外の現地から日本まで、バイオマス燃料の輸送をトータルでサポートする独自の物流システムで、顧客と社会に貢献している。

### 愛知海運 株式会社

[愛知県]

港湾運送事業等

<https://www.aikai.co.jp/>

company profile

#### 一貫して物流を担うことで 顧客のコストを抑える

1943年の設立以来、東海エリアと世界の港を結び、港湾運送事業を中核とした総合物流サービスを手掛けて、時代と顧客の多様なニーズに添えてきた愛知海運株式会社。長い歴史を持つ同社を2013年から牽引し、卓越したリーダーシップで同社のさらなる発展を実現してきた代表取締役社長・原弘三氏は、同社の強みについて次のように語る。

「当初は、石炭をはじめとする内航輸送の他、原木や陶磁器、楽器などの輸出入に携わっていましたが、時代の変化に応じて様々な物流サービスを提供してきました。当社は、愛知県の港湾運送事業者として唯一、県内すべての物流港湾に事業拠点を保有しており、グローバルな物流を展開しているのが大きな特長です」

かつては、同業他社の協力企業として、貨物の輸送や荷受けを請け負う事業を中核としていたが、30年ほど前から、新規顧客を開拓し、元請けとしての仕事を増やす取り組みに注力することで、事業を大きく進展させてきた同社。とりわけ、スクラップや製紙用パルプの原料であるチップなど、包装

されないまま積載される貨物である「バルク」を得意としており、顧客の高い評価を得てきた。

その中で、近年、同社が独自に開発したシステムとして大きく注目されているのが、「AIL (Aikai Integrated Logistics)」である。これは、海外の現地から国内まで一貫した物流を担うことで、確実な貨物管理と安定した物流コストを実現する新しい物流システム。現在、バームオイルを搾り取った後のヤシ殻(PKS)をはじめとする、バイオマス発電所向けの燃料の輸送に活用されており、顧客と社会に貢献する革新的なシステムとなっている。このシステムを開発した背景について、同氏は語る。

「バルク貨物の取り扱いについてのノウハウを蓄積していたこともあり、大手商社から依頼を受けてPKSの輸送に加え、バイオマス発電所や貨物の保管場所の確保も当社で手掛けて成功したことが端緒となりました。その後、別のお客さまが視察でインドネシアやマレーシアに赴くのに同行した際、お客さまが現地でのPKSの品質や集荷状況に不安を感じていたため、当社が貨物管理を含め、ワンストップで物流を請け負うことを提案させていただいたのです」

の挑戦は、バイオマス発電の発展に大きく寄与することとなった。

AILは常に進化を続け、現在では貨物の含水量を測定できる他、ドローンで撮影した在庫貨物の画像を土木用のソフトウェアで解析し、貨物の量を測定することもできる。貨物の様子や輸送、荷揚げなどの情報は、クラウドを通じて動画をはじめとする様々な形で確認することが可能となっているなど、顧客が常に状況を把握できるシステムを整えた。今後は、同サービスをさらに充実させ、ユーザーの拡大に努めながら社会に貢献していく考えだ。

「社内の部署はもちろん、企業を横断した取り組みに挑戦することで、AILという新たな価値を創出することができました。物

こうして、新たな価値創出を目指す同社の新たなチャレンジがはじまった。

#### 部署と企業を 横断したチャレンジで 新たな価値を創出

「AILを開発することで、お客さまに低コストで安定した貨物をお届けしたいという強い想いがありました。従来とは異なる分野の業務も発生する新規事業だったため、手探りでシステムを構築していきました」と振り返る同氏。まず、協力企業をはじめとする現地でのネットワークづくりに取り組み、規定の量・質のPKSが期日までに集まるかを含め、徹底した監視体制を構築した。

「PKSは重量単位で取り引きされていたため、過去には現地で異物を混ぜたり、水分を含ませたりして、不当に重量を増やしていた事例もあつたようです。船が到着した時に、品質が担保された十分な量の貨物がなければ、私たちとお客さまの双方に大きなロスが発生してしまいます。それを防ぐためにも、チェック体制の構築と情報収集が大切だと考えました」  
また、顧客のコストを可能な限



代表取締役社長 原弘三氏  
今後は、太陽光パネルのリサイクル事業にも注力し、社会に貢献していく考えだ。夢は、港で自動走行する電気駆動のトラックなどがバイオマス燃料を運ぶような、「電気で動くものが電気をつくるスマート物流」の実現だと語る。

#### 部署と企業を横断した挑戦が 新たな価値の創出を実現する



同社のエントランス。

人と社会に貢献するような新たな価値は、単独の部署や企業だけではつくることができない。部署と企業を横断する挑戦によってこそ、創出することができる。

経営のヒント

新たな価値を創出するための同社のチャレンジは、これからも続いていくことだろう。